



内なる「ギャル」が 生まれた外側の世界で

人間文化研究機構 国際日本文化研究センター職員

仲田 亜也子

法学部法律学科

2010 (平成22) 年卒業

ある研究者に「生き方がギャルだね」と言われたことがある。これまで一度もそんなことを言われたことがなかったので、とても驚いた。しかも、褒め言葉だという。雑談のなかで、隕石さながらのインパクトをもって降ってきたその言葉は、今も、それなりの質量で心に残っている。

わたしには思いつきで物事を決めてしまう癖がある。高校生だったある日には、安全に進んでいく未来に窮屈さと疑念を感じて、受験ムードのなか、大学進学を辞めた。その後、ひとり暮らしのできる専門学校を選び、開放的な日々を過ごしたことで、却って冷静になり、社会で自由に生きていくには、圧倒的に力不足である自分に気づいたのだ。

同級生から3年遅れて龍谷大学に入った。法学部を選んだのは、法律の知識は生きる武器になるのではないかという目論みと、法律を通して見る世界は、きっと見える景色が違うのだろうという好奇心からだったが、はたしてその通りだった。法学の世界で多角的に物事を見ることを覚え、凝り固まっていた脳は、ごりごりと、こじあげられていった。もっと広い世界を求めたわたしは、当時、お世話になっていた教授の勧めもあって、海外留学を決意していた。

そこは、日本の外側だった。多国籍な人たちと他言語で会話をし、異文化が混じり合うなかで生活をする。外側から見た日本は、繊細で、洗練されていて、しかし地球上ではありふれた、でもどこか風変わりな島国のひとつだった。歳月をかけて、ひっそりと築かれつつあったわたしの稚拙な価値観や思い込みは、スクラップアンドビルドされていった。

同じ時期に留学した仲間や、外側で出会った友だちとは、今でも親交がある。彼らはみな、独自の価値観をもち、多彩な人たちとの交流を楽しみ、スパイスの効いた人生をのびのびと味わっている。

あの研究者がわたしのなかに見た「ギャル」は、外側の世界で得たものとして出会った彼らによって作りあげられたものなのだろう。それらが「ギャル」と名づけられたことで、価値あるものとして知覚され、しっかりと心に息づき始めたのだ。思いつきで物事を決めてしまう癖は直らないだろう。けれども、以前よりも少しだけ寛容な、心強い気持ちでいられるのである。

法学部在籍中に留学した上海師範大学 (中国) のクラスメイトたちと

